

図書館テーマ展示 期間●2006. 10. 16 ~ 11. 25

展示場所●図書館ブラウジングルーム / AV資料室

フラメンコ

～歴史と、現在のその姿～

企画●国立音楽大学音楽研究専修
(音楽学研究コース、音楽情報社会コース) 専門ゼミ I,II

11月22日(水)に6号館の110スタジオにて
「2006年度国立音楽大学音楽研究専修(音楽学研究コース、音楽情報社会コース)専門ゼミI,II
研究発表会フラメンコ～歴史と、現在のその姿～」を行います。
それに先立ち、今回の展示ではフラメンコについての簡単な歴史の概要と代表的な
踊り手について紹介します。

『フラメンコ～歴史と、現在のその姿～』

国立音楽大学音楽研究専修(音楽学コース、音楽情報社会コース)専門ゼミ

11月22日(水)に6号館の110スタジオにて「国立音楽大学音楽研究専修(音楽学研究コース、音楽情報社会コース)専門ゼミ」研究発表会「フラメンコ～歴史と、現在のその姿～」を行います。それに先立ち、今回の展示ではフラメンコについての簡単な歴史の概要と代表的な踊り手について紹介します。

「研究発表会」とは、ひとつのテーマを設定し、集まった何人かの学生で共同研究するというもので、毎年音楽学学科の3年生を中心に有志で行われてきましたが、新カリキュラム第1期生となる私たちの学年からは正規の授業として行われることになりました。コース制度開始に伴い、メンバーも従来の「音楽学学科3年」という枠ではなく、音楽学系のコースに進んだ他学科の学生も加わることになり、去年までとは違う形での「研究発表会」となります。

異なる個性が集まり共同で一つのことを創りあげることが想像以上に大変なことで、例年テーマ設定がその最初の且つ最大の難関となっています。私たちも例に漏れずこの難関に苦戦しましたが、たくさんさんの時間を費やして話し合った結果「フラメンコ」というテーマに辿り着きました。

フラメンコって何?

スペイン南部、アンダルシア地方を起源とする音楽、舞踊の中で、とりわけその地のロマ(ジプシー、同義でスペイン語のヒターノ)たちによって創りあげられたもののことを「フラメンコ」といいます。(ジプシーという名称には差別的意味合いが含まれるとして、近年ではロマあるいはロムの語を用いるのが一般的である。ただし、フラメンコ特有の性格や一定の曲種を説明する場合、固有名詞としてヒターノの語を使用することがある。)

日本では、単に「スペインの民族舞踊」と思われている感もあるフラメンコですが、実はカンテ(歌)、バイレ(踊り)、トーケ(ギター)という3つの要素によって成り立っているものなのです。

フラメンコの語源

「フラメンコ(flamenco)」というスペイン語は古くから存在していましたが、「ロマの」「ロマ風の」を意味するようになったのは、19世紀後半頃からだといわれています。また、この語は、ものの考え方や服装などの人間生活の表れ一般～気前の良さ、騒々しさ、もしくは“粋”といった言葉で表されるある種の気質のようなもの～を形容すべく用いられます。

「フラメンコ」という言葉の起源については、諸説紛々で今日においても確信のもてる結論は出ていないが、割合に支持されている説として、ロマを含む下層階級の隠語から引き出された言葉だとする考えがあります。

彼らの言葉の中にスペイン標準語のフラマ(炎)から生じたフラメアンテという形容詞があります。それが次第に「フラメンコ」に変化し、「派手な」「気性の激しい」「無頼で気取った」といった性格を表す言葉として一般化して、主にロマに対して用いられるようになったという説です。

フラメンコの歴史

今日のフラメンコの原型が出来上がったのは18世紀後半頃だといわれています。この時期以前のいつ頃フラメンコの歴史が始まったのか、ということを見極めることは容易ではありませんが、アンダルシアという土地独自の文化が今日のフラメンコを特徴づけていることは疑いようのない事実でしょう。古代のタルテッソ人、フェニキヤ人、ギリシャ人、ローマ人、ゲルマン（西ゴート）人、モーロ人、ペルシャ人、ユダヤ人、そしてロマ…。アンダルシアの地を訪れたこれらの諸民族の関わり合い～アンダルシア独自の文化を形成するに至ったスペインの歴史～に深く根差しているのが、フラメンコという芸術なのです。

8世紀始めから15世紀の末にまで及ぶ約800年間のイスラム教徒による支配は、フラメンコにも大きな影響を与えました。今でもフラメンコのリズムや歌の節回しなどには、モーロ人（スペインに侵入したイスラム教徒のこと）のもたらした東洋音楽の要素が多く見受けられます。

17世紀の後半頃からは、放浪の民口マがアンダルシアに定住し始めスペイン土着の民謡を吸収しながら、フラメンコの原型を作り上げていきました。そして、カフェ・カンタンテと呼ばれる酒場が生まれ、ロマが自分たちの芸を一般向けに見せるようになったのが、19世紀の中頃のことです。

その後20世紀初頭までの、フラメンコが非常に発展を遂げた半世紀間を「カフェ・カンタンテの時代」といいます。次第に、ロマ出身以外の人（パージョと呼ばれる）も、フラメンコに関わるようになり、アーティストたちは酒場を渡り歩くのが普通で、アーティスト同士の交流がフラメンコをより表現の豊かなものにしました。

1910年を過ぎた頃から流行歌（クブレ）に追いやられフラメンコを専門とするカフェ・カンタンテは衰退していきました。しかし、その間もバイレとトーケは発展し続け、衰亡の危機にまで瀕した正統派カンテも1950年代にスペインの国際化が進むと同時に復活を遂げるのです。

カンテ（歌）・バイレ（踊り）・トーケ（ギター）

前述したとおり、カンテとバイレとトーケはフラメンコの3大要素です。ここでは簡単にこの3つについて紹介しましょう。

フラメンコといえば、まずあの華麗な踊りをイメージされる方も多いと思いますが、フラメンコの根源はカンテだといわれています。カンテでは西洋音楽いわゆるクラシック音楽で用いられるようなベルカントや裏声を全く使うことなく、しぼりだすようなしわがれた声や演歌のようにこぶしをまわした声を使います。フラメンコの形成に関わった民族の影響を受けているため、言語はスペイン語に独特ななまりが入っています。カンテはリズム、発声、発音が難しいため、習得するのは大変だそうです。

カンテの次にバイレが生まれました。バイレはフラメンコの中で、最も華やかで注目を浴びるポジションです。フラメンコの踊りといえば、フリルのついた華やかなスカートをひるがえして踊るイメージが強いのではないかと思います。このような衣装は19世紀の終わり頃から20世紀の初めのアンダルシア——ちょうど、フラメンコが盛んになってきた頃の衣装が基盤になっています。このころの女性は皆、長いスカートを履いていたそうです。フラメンコの小道具として使われているショールや扇や帽子も当時から風習です。しかし、現在は様々な格好で踊る踊り手も増えてきており、服装は自由になってきています。

カンテから始まり、バイレが生まれフラメンコが形成されていく後に、この2つにトーケの伴奏が

付きました。ギター伴奏が現われたのはカフェ・カンタンテの時期の頃だといわれています。フラメンコではクラシックギターと同じくアコースティックギターを用います。しかし、フラメンコギターでは軽く、はっきりと澄んだ音を求めるため、クラシックギターより表面板が薄く出来ています。また、フラメンコギターはメロディーを演奏するだけでなく、ギターの胴を叩いてリズムをとるので、真ん中にあいている穴の横にプラスチックの板が張られています。フラメンコの伴奏としてのみ使われていたギターですが、現在ではソロで演奏することも多くなってきています。

フラメンコの形式

フラメンコには様々な曲の種類があり、その曲の種類のことを形式と呼びます。形式は50以上存在するといわれており、明るく楽しい曲から、暗く重い曲まで多岐にわたります。メロディーや歌詞は同じ形式でも異なるものが使われることが多いため、クラシック音楽でいう舞曲（メヌエットやガヴォット）と同じように曲のリズム、調性、性格から形式を判別します。例えば、フラメンコの母とも呼ばれるソレアという形式は3拍子系のリズムで、スペイン特有のミの旋法(ミファソ#ラシドレミ)という音階が使われ、そして人生の悲哀を表現するという特徴をもっています。一方、喜びという意味であるアレグリアスという形式はソレアと同じ3拍子系のリズムですが、ミの旋法ではなく長調の音階が使われ、曲調も明るく活発です。フラメンコを始めたばかりでは形式を全て聴き分けることはかなり難しいようです。

展示資料

勝田保世『砂上のいのち-フラメンコと闘牛』音楽之友社 1978年 講求記号 J11-369
フラメンコにおける「ドゥエンデ」の要素など、闘牛とのかかわりを見出しながら記述された書。闘牛の音楽そのものに関する記述もされている。

長嶺ヤス子『長嶺ヤス子:炎のように、火のように』日本図書センター 1997年 講求記号 C62-451
様々な分野で活躍した人物の自伝や評伝を集める「人間の記録」シリーズの第60巻。創作的な色彩の強い大掛かりな舞台を制作し、主演を勤めた長嶺ヤス子氏の自伝的著書。

天本英世『スペイン巡礼』話の詩集 1980年 講求記号 J39-414
俳優であり、スペインの詩人ガルシア・ロルカの詩の朗読者でもある天野英世の七ヶ月にわたるスペイン全土の旅の思い出をつづった一冊。

天本英世『スペイン回想』話の詩集 1982年 講求記号 J7-613
『スペイン巡礼』の出版から2年、既出の本では書ききれなかった事実、周囲からの反響、新たなるスペインへの想起を語る。

ホセ・スピラ著 濱田滋郎訳『スペイン音楽』白水社 1961年 講求記号 C14-699
フラメンコや、近代スペインの国民学派以外のスペイン音楽について記述された本。数多くのスペイン音楽家の名が挙がっている。

阿部力編『フラメンコ奏法-その魅力と秘密-』 連合出版 1992年 講求記号 C55-746
フラメンコギターの奏法の解説。ラスゲアードやピカードといったフラメンコで使われるギターの奏法を詳しく紹介しており、練習法についても言及している。

小海永二『スペインの吟遊詩人 ガルシア・ロルカ評伝』 読売新聞社 1981年 講求記号 J39-994
スペインの詩人で、フラメンコの発展に大きく関わったガルシア・ロルカ、その生涯と作品について記述されている。

『パセオ・フラメンコ』 パセオ 講求記号 P1272
スペイン、日本のフラメンコ・アーティスト、教室、コンサートの最新情報、フラメンコ上達に欠かせない記事が満載の、月刊フラメンコ情報誌。

Gwynne Edward 著、Ken Hass 写真 “Flamenco!” Thames & Hudson 2000年 講求記号 J92-602
フラメンコの歴史や現代のフラメンコの様子を写真付きで解説する一冊。

D.E. Pohren “The art of flamenco” 第5版改訂増補版 Society of Spanish Studies 1990年 講求記号 C56-445
フラメンコ全般の解説と、フラメンコの名盤の紹介や鑑賞の楽しみについて書かれており、フラメンコの入門に最適な一冊。

Walter Starkie “Spain : A Musicians Journey through time and space v.2 Spain from coast to coast in search of the seven dances” Rene Kister 1958年 講求記号 C12-284

Tina Deininger, Gerhard Jaugstet “Carmen s dance” Ear Books 2003年 講求記号 J101-052

“Die Musik der Sinti und Roma Bd.3. Der Flamenco” Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma 1998年 講求記号 J92-213

James Woodall “In search of the fire dance” Sinclair-Sterenson 1992年 講求記号 C55-778

Miguel Alcalá “Le flamenco et les gitans” Filipacchi 1987年 講求記号 J68-315

Barbara Thiel-Cramer “Flamenco” Remark 1991年 講求記号 C54-826

パネル

シルベリオ(1831～1893)
カフェ・カンタンテ時代における最も有名な歌い手(カンタオール)。あらゆる時代を通じて、最良のカンタオールであると評される。カフェ・カンタンテそのものの成立に大きく寄与した人物でもある。

パコ・ルセーナ
カフェ・カンタンテ時代における不世出のギター奏者(トカオール)。地方の出身で上京し、カフェ・カンタンテに出入りする傍らギターの腕を磨いた。当時セビージャ全土にその名をと轟かせた名ギタリストである。

アントニオ・チャコン(1865～1929)

カフェ・カンタンテの最盛期に「皇帝」と称されたカンタオールである。比類なきハイ・テナーの美声とそのドゥエンデ(フラメンコにおける靈感、魔性のようなもの)によって、もはや“大衆的”と言っても差し支えないほどの人気を博した。

ラ・マカローナ(1860～1947)

生粋のヒターナ(ロマ)として生まれたカフェ・カンタンテ時代のバイオーラ(踊り手)。余人の追隨を許さないドゥエンデを有していたとされる。

ニーニャ・デ・ロス・ペイネス(1890～1969)

本名をパストーラ・パボンという。セビージャにジプシーの血を持って生まれたカンタオーラ(歌い手)で、カフェ・カンタンテにおいてその技術を磨いた。20世紀における最高の実力者と呼び声が高い。

ベルナルド・エル・デ・ロス・ロビートス(1886～1969)

録音媒体が音楽に対してどれほどの力を与えたかということを考えるのなら、ロビートスの名を挙げないわけにはいかない。本格派のカンテ(カンテ・プーロ)復興の旗印であった『フラメンコの真髄』において、発売当時69歳であった彼はその録音に参加し、黄金時代の名歌手に揉まれたその技術を披露しているのである。

フアン・タレーガス(1891～1971)

カフェ・カンタンテ以前のフラメンコ草分け時代からの名門である一族の一人で、著名なカンタオール。カンテの祭典において脚光を浴び、「カンテの長老」「生き字引」などと称される。

ラモン・モントーヤ(1880～1949)

古くから優れたフラメンコ・アーティストを輩出してきたモントーヤ家のギター奏者(トカオール)。「現代フラメンコ・ギターのスタイルの礎を築いた人物」と評される。

パコ・デルシア

フラメンコギターの世界に、その圧倒的な超絶技巧と類まれな独奏力で革命をもたらした現代の巨匠。そのプレイスタイルはフラメンコだけではなくブラジル音楽やジャズ、さらにはクラシックにまで影響を与えた。

リカルド・ニーニョ(1904-1972)

セビージャのトカオール(ギタリスト)。ロマの出身ではなかったが、当時フラメンコ愛好家から絶大な人気と支持を得た演奏家である。

カフェ・カンタンテ

1860年頃にスペインのセビージャから発祥し、20世紀初頭まで流行した「歌と踊りのあるカフェ(バー)」。フラメンコの爆発的な流行と発展を促した。また、多くのフラメンコ・アーティストがその技術を学び、披露する場でもあった。



Barbara Thiel-Cramer “Flamenco”より

図書館展示 10月 2006

『フラメンコ～歴史と、現在のその姿～』



企画 国立音楽大学音楽研究専修(音楽学コース、音楽情報社会コース)専門ゼミ

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>